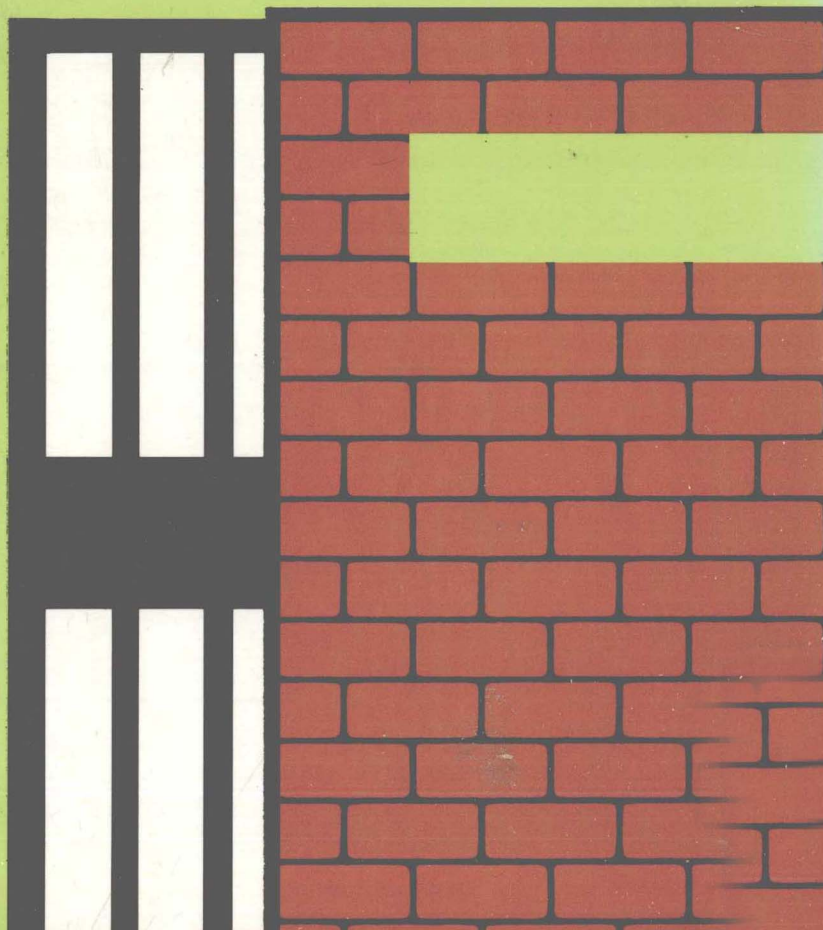


教育の日

熊坂 崇 著

女子高生 校門圧死事件



著 者 略 歴

熊 坂 崇 (くまさか たかし)

1929 年神奈川県生まれ。1947 年同県立
秦野中学校卒業。鎌倉アカデミア中退。
同県庁雇。横浜、秦野、小田原の小学
校勤務。勤労学生として玉川大学文学
部教育科卒業。12 年間の在籍。教諭と
して川崎市小学校勤務、1990 年定年退
職。現在にいたる。

教育の日

1993 年 5 月 20 日 初版発行 ©

定価 1,236円

(本体1,200円)

著 者 熊 坂 崇

発 行 者 串 原 国 穂

組 版 所 日 本 ハ イ コ ム

印 刷 所 互 恵 印 刷

製 本 所 関 山 製 本 社

発行所 リーベル出版 (Liber Press)

〒101 東京都千代田区神田神保町3-17-3

電話 (03) 3234-1368 FAX (03) 3234-0709

ISBN4-89798-306-1 C0037

教 育 の 日

女子高生校門圧死事件

熊 坂 崇

リーベル出版

まえがき

七月七日は「七夕」の日である。八月になると「原爆の日」や「終戦記念日」がある。これは公認の記念日である。記念日の中には、昭和天皇の誕生日もあった。現在は「みどりの日」となっている。そして天皇誕生日はクリスマススイブの前日の十二月二十三日と、平成という日本
の年号に変わってからそう決まった。庶民は通知を受けるだけだったが。現在の天皇からすれば曾祖父になる明治天皇の誕生日を「明治節」といった。それが現在は「文化の日」となっている。

このほかに六月十日は「時の記念日」だった。五月二十七日は「海軍記念日」だった。「時の記念日」はいまも残っているが、「海軍記念日」はどうやら私の息子の誕生日でもある七月二十日の「海の記念日」と平和な呼称に変わったようだった。

この二、三日の新聞を必要があつて読んでいたら、七月七日がもう一つの記念日だったことを思い出させてくれた。盧溝橋^{ろこうきょう}爆破記念日だった。第二次大戦中の日本と中国との戦争発生日だった。現在では日中戦争というけれど当時は戦争という言葉を使わないで日本側では日支

事変と言っていた。新聞で読んだのは読んだのだが、発生年が見当たらないので岩波の日本史年表で確かめてみた。

「一九三七年七月七日 盧溝橋で日中両軍衝突（日中戦争始まる）」

とでていた。昭和十二年とあった。私の小学二年生のときだった。五十五回目の記念日だろうか。日本では記念式典はなかったが、中国の現地では式典が行われたとのことだ。

はたして我が国の人たちの中で、どれ程の人が気づいていることだろうか？ 中国の人たちには決して忘れることの出来ない記念日だった。六十三歳の私ですらこの程度の気づきかたなので、私より若年の人たちが盧溝橋事件と聞いたり、目にしたりしても、

「知らない？」

とげげんに思われるのが現状のことだった。

このところ次から次へと目まぐるしいニュースの連続であるし、テレビ時代なので目新しいニュースの放映を各局でせりあっている。何かニュースも使い捨てのような扱いだった。

私は教員暮らしだったせいかな、そして四十一年間も戦後教育とつきあって来たので、九〇年七月六日の兵庫県立神戸高塚高校の女子高生の校門圧死事件は忘れることが出来なかった。この事件は、私の観察では戦後教育の落とし子であるように考えられた。そしてこの事件の様相と経過は、いま横浜地裁で進められている「なだしお事件」と結構相似していることも見逃せない事だった。

私は校門圧死事件は、我が国の戦後教育の実際上の精神を、偶発的な形をとってはいるが、結構全国の先生たちの信奉している指導観念を顕現しているように考えられた。そのような象徴的な事件であるように考えられた。

私は七月六日を庶民からの、下からの「教育の日（教育を考える）」としたほうが、我が国の教育改革を推進するために有効だと考えている者である。このような提言ではなかったが、これに似たような名社説が、この事件報道最中^{さなか}に『朝日新聞』に掲載された。

私の見ている感じでは残念なことだが、社説の提言についての先生達の反応は鈍かった。必然の進行というか、成り行きだが、事件以降現在までの教育関係の事件や事故において、子どもの権利（人権）に画期的な変革があったかと言えば、答は否であった。さしたる変化は見えていないようだった。

私はこの事件の経過に注目をしている。その中で私が知ることが出来た事柄、関連した最近の事件を紹介して、文の序としたい。

★ 校門圧死事件の高校の校門は、自衛隊及び機動隊の建物の門扉にとりつけられたために作られたものである事。多くの先生方の気づかれていない知識である。

神戸高塚高校の門扉（二三〇キロ）は六〇年安保の時、保安関係機関がその管理下の建物

を暴力デモの侵入から守るために設計されたものです。この種類の門扉は学校建築物には必要です。警察・裁判所・防衛庁等の建築物の設計された門扉を教育現場に採用した県教育委員会に重大な責任が有ります。

（一九九二年『文芸春秋』六月号、一八二頁）

この文は、「校門圧死事件」教師の手記中にあつた。筆者はこの教師を激励されている大学教員だった。貴重な師と仰いでいられた。

私はこの大学教員の方とは異なる見解に立つ者だが、この方が、

小生は〇〇大学で二五年間物理学を教員志望の若者達に教え、約五百人の教え子を教育界に出しました。

（同 一八二頁）

と書かれているので、門扉の性格についての記述は疑いのない事実と私には考えられた。

ただ、この大学の先生が、

「形は内に秘めているもの（思い）を表すものだ」

ということに言及されていられないのが、私には残念と考えられた。

どうということかと言うと、

警察・裁判所・防衛庁等と学校も同じ機能を果たす建築物であると言う内なる思いが流れているという事だった。県教育委員会もおそらく何の疑問も持たなかったのも別に不思議ではなかった。

別の言葉であらためて表現すると、次のようになるのだった。

「これらの建築物の中の世界の生活論理と建築物の外の世界の生活論理とは、異なった世界であることを表しているのだった」

いまでもどこかでは使われているのだろうが、旧軍時代には建物の外の世界を沙婆しゃばと言っていた。それでは建物の中の世界を何と言っていたのだろうか？

私は軍隊生活がなかったので判らないのだが、もっとも調べれば判ることだったが、ここでは、手許の辞典を参考にしておく。

しやば【沙婆】「仏」いろいろな苦しみをしのぶべき、この世。人間世界。

〔俗〕「監獄などから」外の自由な世界。

（大きな活字の 三省堂『国語辞典』四七〇頁）

無論、旧軍時代には外の世界を仏語ではなく俗語の意味内容で使っていたのだった。

海自の学校での体罰

広島 江田島 上級生、2人に殴るける

(一九九二・七・七『読売新聞』夕刊一八面)

衝撃スクープ

旧軍よりひどい!? “新兵”が半身不随に

海上自衛隊・江田島の凄惨『内部リンチ』事件

旧海軍兵学校の輝かしい伝統を誇る「教育の本拠地」で信じがたい蛮行が行われていた。この4月に入学したばかりの新入生に「指導」の名のもとに殴る蹴るのリンチが加えられ、なかでも「ハツパ」と称する暴行を受けた一人は頸髄不全損傷の重傷を負っていた。

校門の門柱の写真には 上から

海上自衛隊 幹部候補生学校 第1科学校 自衛隊江田島病院

との表札が写っていた。

(一九九二・七月一八日号『週刊現代』講談社、二八九頁)

沖縄水産が出場辞退

夏の高校野球 3年生が暴力

(前略) 沖縄大会は六月二十一日に開幕。第2シードの沖縄水産高は十二日の2回戦に初登場して知念高と対戦する予定だったが、優勝候補の筆頭に挙がっていながら不戦敗で姿を消すことになった。

(並んでの記事)

日本学生野球協会は六日、…… 審査会議を開いて九件の高校の不祥事を審議、それぞれ処分を決めた。

各校の処分は次の通り。

【除名】 (大阪) S高の監督に有印私文書偽造事件

【対外試合禁止】 (北海道、軟式) F農に部員バイク、乗用車などの窃盗無免許運転事故▽

(福岡) S高に部員の暴力事件▽ (埼玉) H高に部員の喫煙事件▽ (福岡) F農に部員の

暴力事件

(一九九二・七・七『東京新聞』夕刊二三面)

おそらくどの学校の校門も、二三〇キロの門扉ではなかっただろうか!?

校門圧死事件の教師が書いた「(事故の)顛末書」や「手記」の中に展開されている一種の指導観について触れておく。

まえがき

（前略） 思えば教員になり一五年目を数えますが、朝早くからクラブの早朝練習また早期補習もし、放課後はおそくまでクラブ活動の連続でした。

学年としてもまず遅刻、欠席をなくしよう、学校に目を向かせ、一生懸命やれば報われるんだ、ということを感じさせようと、他学年より厳しい指導をし、それが3年になった今、花開こうとしている時に、このようなことになり、謝っても謝りきれないと思います。

お子さんを亡くされた御両親を想うと心が痛み、今はただ亡くなられた石田さんのご冥福を祈るのみです。

（一九九〇年八月五日号『サンデー毎日』毎日新聞社、一七一頁）

神戸の高塚高校にしても、海自の第1科学校にしても、沖縄水産高校にしても、対外試合禁止のS高校、F農業高校にしても、先生なり上級生なりが同様に

「指導である！」と自認して

事件を発生させてしまっているのは何故だろうか!?

教育の日に 考えてみたいことである。

一九九二年七月八日

熊坂 崇

目次

まえがき	3
一、校門圧死事件は、戦後教育の象徴	13
(一) 「あつてはならない事故」	14
(二) 「深い憤りの念」	34
二、遅刻指導の見失つたもの	51
(一) いつも以上に厳しい態度が必要	52
(二) 体感指導	70
三、渦中の二つの花	101
(一) 「朝ひとり十分早く起きてくれれば」	103
(二) 幻の目撃生徒たちの作文	131
四、てん末書	155

(一)	細井教諭の顛末書	156
(二)	「私ならすぐに現場に駆けつける」	184
五、	子ども中心の教育	219
(一)	「全国の学校の教員室に僚子さんの遺影を」	220
(二)	「ひとりよがりだった」	240
	おわりに	267

一、校門圧死事件は、戦後教育の象徴

(一) 「あつてはならない事故」

今年の七月六日は、新聞休刊日だった。朝刊がなかった。

「神戸の校門の事件から一周年かな？」

とつぶやいたら、妻が、

「お父さん、二年目ですよ」

と訂正の答えがかえってきた。

大阪の花博の年の事件だった。私は、四十一年間の公立小学校教員生活を終了して定年者の生活に入ったばかりだった。

事件はそれから三ヶ月たったの七月だった。私たち夫妻は花博と校門＝鉄扉に参詣するため神戸に向かった。八月上旬のことだった。

梅雨は長いとの予報だった。しかし夜に降って昼は曇り空だったのでしのぎやすい天候だった。が、この三日ばかりは本格的な真夏日の晴天だった。

事件の年は、暑い梅雨と夏日の続いた天候だった。

「二年たった各々刊紙には、この事件がどの程度に書かれているのだろうか？」

との問いをもつて五紙ばかりに目をとおした。一紙だけ次の記事をのせていた。

校門圧死事件から2年

全校集会開き

生徒らが合掌

神戸市西区の兵庫県立神戸高塚高校で、一年生だった石田僚子さん（当時十五歳）が、教師の閉めた門扉に頭を挟まれ死亡した校門圧死事件から二年を迎えた六日朝、同校で全校集会があり、教師と生徒約千五百人が石田さんのめい福を祈った。校門前では教職員組合や市民ら約三十人が花束や菓子をそなえた祭壇で事件の起きた午前八時半から次々と手を合わせた。

校門を押した元教諭は業務上過失致死罪に問われ、神戸地裁で審理が続いている。

（二九九一・七・六『朝日新聞』夕刊一二面）

七日の朝刊を開いた。一紙が書いていた。社説とかテレビでは触れられていなかった。

「去年は どうだったろうか？」

庭のプレハブ倉庫を探した。

三紙の記事があった。